

「形容詞的用法」不定詞の統語と 意味解釈について

日 高 俊 夫

1 はじめに

英語における不定詞節については記述文法、生成文法の両面から夥しい研究の蓄積があるが、本稿が分析の中心とするのは、学校文法においていわゆる「形容詞的用法」と呼ばれる不定詞節 (Attributive Infinitive Clause; 以下 AIC) の中でも、AIC が先行する名詞句と文法的関係を持たない例である。

AIC 内の動詞と先行する名詞句との文法的関係に基づいて AIC を分類すると、大きく分けて、一般の関係詞節と同様に AIC 内に空所のあるものとそうでないものに分けられる。前者の例としては次のようなものが挙げられる。

(1) 関係代名詞的な不定詞

- a. He was the last person to leave the office.
- b. He was the last person to rely on.

(2) 関係副詞的な不定詞

- a. What do you think is the best way to help them?
- b. There is no reason for us to give it up for impossible.
- c. We have good reason to worry.

一方、AIC 内の動詞と先行名詞が明確な文法的関係を持っていないものは、主要部名詞との意味的關係を考慮すると、次のような分類が考えられる。

(3) 概ね「～するための」の意味を表す AIC : P (urpose) タイプ

- a. Don't you have a tool to open this bottle?
- b. Discussion to regulate working conditions is a must.

c. This is a pan to cook stew.

(4) 同格的 AIC : C (omplement) タイプ

a. He has a strong desire to go abroad.

b. I have had opportunity to come in contact with all sorts of people.

(安井, 1983)

本稿では、(3)のタイプの AIC (以下「P(urpose) タイプ」とする) と(4)のタイプの AIC (以下「C(omplement) タイプ」) は異なる統語構造を持っていることを示す。具体的には、(1)、(2)および(3)タイプの AIC が関係詞節と同様の CP 構造を持っているのに対して、(4)のタイプは TP (もしくは IP) レベルの構造を持つことを主張する。また、(3)および(4)のタイプの AIC に関しては、特質構造 (Pustejovsky (1995), 影山 (2005), Hidaka (2012) 等) を用いて、意味解釈のメカニズムを記述・説明することを目標とする。

2 「修飾」の構造

これまで提示してきた AIC は「先行する名詞句を修飾する」という共通性を持つと考えられるので、具体的な分析の前に、「修飾する」とはどのようなことかを確認しておきたい。

Zubizarreta (1987) は統語構造における「修飾」を次のように定義している¹。

(5) Rule of Modification

A modifies B in the context: [c ...A...B]

iff C immediately dominates A and B, C is a projection of B, and B is not a head.

If A is an adjunct predicate which contains a variable x , then B or the head of B contains an arg-variable with lexical index i and x is assigned the value i .

(Zubizarreta, 1987, 23)

通常の関係節はこの定義にあてはまり、例えば、関係代名詞節による修飾としては、次のような構造が考えられる。

(6) [*DP* the car_{*i*} [*CP* which_{*i*} he bought *t_i*]]

以下で議論する AIC は基本的にこの修飾の構造的定義に合致するものと考えられるが、統語的にも意味的にも異なる振る舞いを示す。その違いを観察することにより、それぞれの AIC を伴う名詞句の特徴を分析していく。具体的には、第 3 節では関係詞的な AIC の統語構造を、Pesetsky and Torrego (2001) をもとに概観する。第 4 節、第 5 節が本論の中心であるが、第 4 節では先行名詞と後続する AIC が文法的関係を持たない例を分析していく。4.1 節では a pan to cook stew のような名詞句の統語構造を、4.2 節では名詞と AIC の意味合成のプロセスを分析する。第 5 節では、a plan to go to Tokyo のような、AIC が先行名詞の内容を叙述するような例を分析し、5.1 節ではその統語構造、5.2 節では意味合成のプロセスを分析する。第 6 節はまとめである。

3 関係詞的な AIC

関係節的な AIC は、定形的な関係節と同じように変項とそれと同一指標を持つ演算子が存在するので、通常の関係節と類似の構造をしているものと考えられる²。次の統語構造は Pesetsky and Torrego (2001) によるものである³。

¹ Zubizarreta (1987) は、他にも所有関係を表す修飾を定義しているが、本稿の分析とは直接関係しないので省略してある。

² 関係節的な AIC については岸本・菊池 (2008) に詳しい分析があるが、本論の主旨は関係詞的な AIC とそうでない AIC との相違点に基づいて後者を分析することであるので、前者についての詳細な分析は別稿に譲る。

³ 「非現実 (irrealis)」の解釈では(7)のどちらの文も可能であるが「現実 (realis)」の解釈を持つ場合、先行名詞は last や only のような「唯一性 (uniqueness)」を伴うものでなければならず、しかも、目的語位置が空所になっている (7b) のタイプの文は容認されない (*The last person [OP C [PRO to talk to ____]] was contacted by the police.) (Kjellmer, 1975; Bhatt, 1999)。

(7) a. [a person [*Op* C [____ to talk to Bill]]] is Sue.

b. [a person [*Op* C [PRO to talk to ____]]] is Sue.

(Pesetsky & Torrego, 2001)

このタイプの AIC を含む名詞句は複合名詞句制約 (Ross, 1967) に従う⁴。

(8) *What is John a person to buy? (← John is a person to buy this car.)

(7)の各文の AIC はいずれも「非現実」(irrealis) の意味を表しているが、「現実」(realis) の意味を表す AIC の場合も同じ振る舞いが観察される。

(9) *Where was he the last person to leave?

(← He was the last person to leave the office.)

また、関係副詞的な AIC でも事情は同じである。

(10) a. *Who is this the best way to help?

(← This is the best way to help Tom.)

b. *What do you have no reason to give up?

(← We have no reason to give up this plan.)

以上、関係詞的な AIC は関係詞節と同様の構造をしており、AIC を含む名詞句は wh 移動に対する島 (island) になっていることを確認した。

4 P タイプ AIC

P タイプの AIC とは次のようなものであった。

(11) (=3)

a. Don't you have a tool to open this bottle?

b. Discussion to regulate working conditions is a must.

c. This is a pan to cook stew.

本節では、このような P タイプ AIC の統語的な振る舞いは関係詞的 AIC と同様であることを確認する。一方、名詞句の意味解釈のメカニズムを考えると、関係詞的な AIC は先行名詞句と同様の指標を持つ空所と演算子が存

在するので、いわば文法的な関係が意味解釈を下支えしている。しかし、P タイプの AIC には同様の空所は存在しないので、意味解釈に際しては AIC の表す意味と先行名詞句との意味的關係が重要になってくる。本節では、特質構造 (Pustejovsky (1995), 影山 (2005), Hidaka (2012) 等) を用いてその意味關係の記述を試みる。

4.1 統語構造

P タイプは複合名詞句制約に従う。

- (12) a. *What is this a pan to cook? (← This is a pan to cook stew.)
 b. *What did you have a heated discussion to regulate?
 (← We had a heated discussion to regulate working conditions.)
 c. *What do you have a tool to open ?
 (← We have a tool to open this bottle.)

これは、関係詞節を伴う次のような複合名詞句中の名詞句の振る舞いと並行的である。

- (13) a. *What_i did he show [DP the proof [CP that Mary stole *t_i*]]?
 b. *Who did you come to [DP the conclusion [CP that you should appoint *t_i*]]?

(桑原・松山, 2001, 20)

つまり、(12)は(13)と同様の構造をしていると考えられるのだが、具体的には、少なくとも次の2つの可能性がある。

- (14) a. *What_i is this [DP a pan [CP PRO to cook *t_i* ?]]
 b. *What_i did you have [DP a heated discussion [CP PRO to regulate *t_i*]]?
 c. *What_i do you have [DP a tool [CP PRO to open *t_i* ?]] ?
 (15) a. *What_i is this [DP a pan_j [CP Op_j C [____ to cook *t_i* ?]]]

⁴ 例文の文法性判断は、筆者の同僚の Nicholas James Kemp 氏による。氏の忍耐強い協力と的確な助言に感謝いたします。

b. *What_i did you have [_{DP} a heated discussion_j [_{CP} Op_j C [____ to regulate *t_i* ?]]] ?

c. *What_i do you have [_{DP} a tool_j [_{CP} Op_j C [____ to open *t_i*]]] ?

(14)において、PRO は任意の人物を指し、wh 句が AIC 内の目的語位置から移動している。一方、(15)では、明示的な関係詞を持たない関係詞節と同様の構造をしており、その中で AIC がいわゆる無生物主語の構文をなしている。結論から言えば、(12)は(14)のような構造をしていると考えられるが、以下でそのことを確認する。

関係詞的な AIC は、(16)が示すように、主語位置が空所となる場合のみ「現実的 (realis)」な用法を持つ⁵(Kjellmer, 1975; Bhatt, 1999)。

(16) a. He was the last person ____to leave the office yesterday.

b. *He was the last person to talk to ____yesterday.

一方、P タイプの AIC には「非現実 (irrealis)」の用法しかなく、「現実 (realis)」の解釈では容認されない。

(17) a. *This is the pan to cook stew yesterday.

‘This is the pan with which we cooked stew yesterday.’

b. *This is the tool to open the bottle yesterday.

‘This is the tool with which we opened the bottle yesterday.’

このことは、(11)の AIC は、(15)のような、先行名詞が AIC 内の主語となっているような構造ではなく、(14)のような構造をしていることを示唆している。(11)の AIC が無生物主語の構文をとっているとすると、先行名詞が意味的に「唯一」の解釈を持てば、「現実 (realis)」を表す文として容認可能になると予測されるが、実際には現実を表す文としては容認されないためである。

(18) a. *This is the most convenient pan to cook stew yesterday.

b. *That was the first discussion to regulate their working conditions.

(‘That was the first discussion that regulated their working conditions.’ の意)

- c. *That was the greatest tool to open the bottle at yesterday's party.

（‘That was the greatest tool with which we opened the bottle at yesterday's party.’ の意）

したがって、(12)は(14)の構造をしていることになるので、(11)の各文は次のような構造をしていると考えられる。

- (19) a. Don't you have [*DP* a tool [*CP* PRO to open this bottle]]?

- b. [*DP* Discussion [*CP* PRO to regulate working conditions]] is a must.

- c. This is [*DP* a pan [*CP* PRO to cook stew]].

以上、本節では、P タイプ AIC の統語構造を確認した。

4.2 意味合成

本節では、P タイプ AIC の意味合成の形式化を試みる。P タイプ AIC の意味で重要になるのは、先行名詞が「唯一」の意味を持ち、かつ AIC 中の主語となる解釈は「非現実」「総称 (Generic)」の他にも「現実」の解釈が可能であることである。このような意味解釈のメカニズムをどう記述していくかを考えていきたい⁶。

意味表示システム

本稿で分析手段として用いる動詞と名詞の意味表示は、Pustejovsky (1995)、影山 (2005) の特質構造を含む意味表示を修正した Hidaka (2012)、日高 (2012) に基づく。例えば、日高 (2012) によれば、名詞「パン」および動詞「叩く」は次のような意味表示となる⁷。

⁵ 注 3 も参照されたい。

⁶ Fleisher (2011) は、先行名詞を修飾する形容詞によって「非現実」の中でモダリティ的な意味を伴う「nominal AIC」とそうでない「clausal AIC」の 2 つに分類し、詳細に考察している。前者の例としては、a long book to assign 等があり、「予想外に長い」「長すぎる」のような意味となる。後者の例としては、a bad book to assign 等があり、「予想外に悪い」「悪すぎる」のようなモダリティ的な意味はない。このような例を本稿の提案するメカニズムで説明できるかどうかを詳細に考察することは、今後の課題としたい。

- (20) パン

QUALIA STRUCTURE

[*Truth-conditional Section*]

FORMAL: $y = food$ (上位概念, 形, 色などの静的な属性)

[CONST: **pan'** (その名詞のトークン)]

[*Non-truth-conditional Section*]

TELIC: $eat(x, y)$ (その名詞概念に内在的に備わった目的, 性質)

[TRIGGER: $bake(z, y)$ (その名詞概念が成立するための外的操作や原因)]

(21) 叩く

QUALIA STRUCTURE

[*Truth-conditional Section*]

FORMAL: $process$ (その動詞のイベントタイプ (process, state, transition のいずれか))

[CONST: ACT ON (x, y) (その動詞の LCS)]

[*Non-truth-conditional Section*]

TELIC: - (その動詞が持ち得る結果状態)

[TRIGGER: - (その動詞が成立するための外的要因)]

これらの意味表示を用いることによって、上述の解釈の区別を記述していく。なお、「現実」の解釈を分析する際に形容詞の表示も提示する。

総称的 (Generic) 解釈

総称的な解釈にはモダリティ的な意味は含まれないが、これは AIC の意味内容が先行名詞の目的役割 (TELIC) に符合する場合に得られる解釈であると分析できる。総称的な解釈となるのは次のような例であった (再掲)。

- (22) (=3)

- a. Don't you have a tool to open this bottle?

b. Discussion to regulate working conditions is a must.

c. This is a pan to cook stew.

本論ではこのような文の意味解釈を、名詞の意味と AIC の意味のマッチングという関係で捉えていきたい。例えば、名詞 *pan* の意味表示は次のようになると考えられる。

- (23)
$$\left[\begin{array}{l} \text{pan} \\ \text{QUALIA STRUCTURE} \\ \left[\begin{array}{l} \textit{Truth-conditional Section} \\ \text{FORMAL: } y = \textit{artifact} \\ \text{CONST: } \mathbf{pan'} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} \textit{Non-truth-conditional Section} \\ \text{TELIC: } \textit{cook with } (x, z, y) \\ \text{TRIGGER: } \textit{make } (w, y) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

鍋の目的というのは、それを使って焼いたり煮たりといった料理をすることであるので、それが TELIC の値として登録されている。また、そもそも TELIC とはその名詞が表すモノの本来的目的であるので、定義上「現実」の解釈はない。(22)の残りの例の中の名詞についても同様に分析できそうである。例えば *discussion* の目的を考えると、何かを決定したり、議論して真実に近づくということが考えられるが、(22b) の AIC の「労働条件を規制する」ということはその「決定」の内容であるので、TELIC の値と符合する。tool に至っては、TELIC の値が未指定となっており、人間がそれを使ってなんらかの目

⁷ 動詞の TELIC 値としては「-」「 ϕ 」「+」の3つを想定している。「-」は、結果状態を持ち得ない純粋な活動動詞 (ex. 叩く) や状態動詞 (ex. そびえる) の値である。「 ϕ 」は、例えば「壊れる」のように既に命題レベルで結果状態 (壊れた状態) が指定されているため、それ以上の指定がなされないことを表す。「+」は、「煮る」のように、命題レベルでは process を表す (「15 分煮る」) が、「?15 分で煮る」のように、若干容認性は落ちるが結果状態を表し得る動詞が持つ値である。また、項構造の記述は省略してある。なお、項構造に直接的に投射するのは命題的な意味にかかわる Truth-conditional Section 中の変項である。

的を果たそうとする場合であれば、その値として導入することができると考えられる。

このように、「総称的解釈」とは、先行名詞の TELIC の値と AIC の意味内容が符号する場合に得られる解釈であると位置づけることができる。

モダリティ的解釈

一方、AIC の表す意味内容が先行名詞の TELIC 値に符合しない場合は何らかのモダリティ的解釈が生まれる。次の文を考えてみよう。

(24) a. This is a pan to buy. (買うべき鍋)

b. Discussion to show to students must be clear.

(学生に見せる { べき / ための } 議論)

c. Do you have a tool to sell me? (売 { べき / つてもいい } 道具)

これらの文は何らかのモダリティ的意味を持っていると言えるだろう。ちなみに、日本語の場合、総称的である場合は「シチューを作る鍋」のように、修飾部と名詞句の間に何も介在しなくても自然であるのに対して、そうでない場合、「* 買う鍋」のように容認性が落ちる。

(25) a. * 買う鍋 (cf. シチューを作る鍋)

b. 学生に見せる ?(ための) 議論 (cf. 労働条件を規制する議論)

c. * 売る道具 (cf. この蓋を開ける道具)

具体的にどのようなモダリティ的意味が読み込まれるかは使われる状況や文脈によると考えられるが、少なくとも、モダリティ的解釈の有無は特質構造を用いた記述・予測が可能であるように思われる。

「現実」的 (realis) 意味

「現実」の解釈がなされるのは、典型的には先行名詞が「唯一」の意味を持つ形容詞による修飾を受け、AIC の主語位置が空所になっている場合である。

(26) a. The [first man [____ to walk on the moon]] visited my school

yesterday. (Bhatt, 1999)

- b. [The last person [*Op* C [— to talk to Sue]]] was contacted by the police. (Pesetsky & Torrego, 2001)

したがって、「現実」の解釈を記述するためには形容詞の意味表示を考えなければならないと考えられる。我々の意味表示においては、例えば *first* は次のように記述できる⁸。

- (27)
$$\left[\begin{array}{l} \text{first} \\ \text{QUALIA STRUCTURE} \\ \left[\begin{array}{l} \textit{Truth-conditional Section} \\ \text{FORMAL: } \textit{order} \\ \text{CONST: } \textit{first}(e) = x / \text{for } \forall y \in e, x \geq y \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} \textit{Non-truth-conditional Section} \\ \text{TELIC: } \phi \\ \text{TRIGGER: } e; \geq \end{array} \right] \end{array} \right]$$

つまり、*first* とは、その構成要素が順序集合となっているあるイベントの存在を前提として、その一番最初の要素を取り出す関数である⁹。イベントの値として *walk on the moon* (x) が、その変項として *man* が代入されると *the first man to walk on the moon* の意味表示が得られる¹⁰。

- (28)
$$\left[\begin{array}{l} \text{the first man to walk on the moon} \\ \text{QUALIA STRUCTURE} \\ \left[\begin{array}{l} \textit{Truth-conditional Section} \\ \text{FORMAL: } \textit{order} \\ \text{CONST: } \textit{first}(e) = x / \text{for } \forall y \in e, x \geq y \end{array} \right] \end{array} \right]$$

⁸ $x \geq y$ は x の方が y よりも時間的に以前であることを示す。

⁹ *rich* 等の通常の形容詞が名詞を項として取る述語であるのに対して、*first* は、少なくとも意味的にはイベントを項として取る述語であることになる。したがって、表層的な統語構造と意味構造が符号しないことになるが、その詳細な分析は今後の課題としたい。

¹⁰ 議論を単純にするため、本論に直接関係のない定冠詞 *the* の意味論は割愛してある

$$\left[\begin{array}{l} \textit{Non-truth-conditional Section} \\ \text{TELIC: } \phi \\ \text{TRIGGER: } e; \geq / e = \{x : \text{walk on the moon } (x)\} \end{array} \right]$$

the first man to walk on the moon とは、「月面を歩く」というイベントの発生を前提として、そのイベント中に含まれる要素の中で時間的に一番最初の主体であることになる。この「イベント発生」が「過去のこと」と認識されれば「現実」の解釈になるし、「可能世界」と認識されれば「非現実」となる。そして具体的にその解釈を左右する主要因は主文の時制や yesterday 等の時を表す副詞的表現であると考えられる。

以上、本節では、特質構造を用いて P タイプ AIC を伴う名詞句の意味解釈を形式化できることを示した。

5 C タイプ AIC

5.1 統語構造

C タイプの文における先行名詞句と AIC の意味的關係は、Higgins (1973, 152) が名詞化表現を含む英語のコピュラ文分析において「指定」(specification) という概念を使って説明していることと通じる。

(29) a. John's dream is to better himself.

b. My reason is that I haven't time.

c. *John's inability is to swim.

d. *My anger was that Bill had lied. (Higgins, 1973, 152)

(30) The complement sentence may occupy the predicate complement position of the copular sentence when it in some way gives the content or constitution of what is referred to by the subject noun phrase.

(Higgins, 1973, 152)

(29c, d) が容認されないのは、補文が主語名詞句の指す内容や構成を与えるも

のではないからということになる。逆に言うと、主語になっている名詞句が意味的にそのような内容や構成を内在しているかどうかが問題となり、名詞句に隣接する位置に不定詞節等が生起しても事情は変わらない。

- (31) a. [_{NP} John's dream [to better himself]]
- b. [_{NP} My reason [that I don't have time]]
- c. *[_{NP} John's inability [to swim]]
- d. *[_{NP} My anger [that Bill had lied]]

つまり、意味的には AIC は先行名詞の補部として機能していると言えるわけであるが、統語的にも AIC が先行名詞句の補部になっていることは、Huang (1982) の Adjunct Condition によっても裏付けられる。一般に補部からの wh 移動は可能であるのに対して、付加部からの wh 移動は不可能である。

- (32) a. *Who did John leave [because of the appointment with]?
- b. Who did John write [a story about]?
- c. What did they think [that the burglar stole]?

ただし、補部になっていても、その補部が CP の場合、移動は不可能である。

- (33) (=13)
- a. *What_i did he show [_{DP} the proof [_{CP} that Mary stole t_i]]?
- b. *Who did you come to [_{DP} the conclusion [_{CP} that you should appoint t_i]]?

(桑原・松山, 2001, 20)

(33) の that 節の内容はそれぞれ補部名詞の具体的意味内容であるので、Higgins (1973) の定義に沿うものであると言える¹¹。したがって、統語的にも that 節が補部位置にあるとするのが自然であろう。補部位置にあるにもかかわらず、(32b, c) と異なり、そこからの wh 移動が不可能であるということは、その補部の統語的ステータスが問題になっていると考えられる。実際、that

¹¹ Stowell (1981) にも同様の議論がある。

節が be 動詞の補部位置にも生起でき、これは C タイプ AIC も同様である。

(34) a. The proof is that Mary stole it.

b. The conclusion is that you should appoint the doctor.

(35) John's decision is to go there.

そして、C タイプ AIC の場合、(32b, c) と同様の振る舞いを示す。

(36) What did John make a decision to do?

このことから、C タイプ AIC は、隣接する名詞句の補部になっていて、かつ CP でなく TP を形成している可能性が高いと考えられる。Pesetsky and Torrego (2001) の枠組みで言えば、C タイプ AIC の to は、C まで上昇しない T であるということになる。

(37) John made [_{DP} a decision [_{TP} PRO to do that]].

ここまでの議論で、P タイプ AIC は CP 構造を取るのに対して C タイプ AIC は TP 構造を取ることを主張したことになる。これは(36), (37)の中の decision は動詞 decide からの派生名詞であり、複雑述語をなしていることが要因であると考えられるかもしれないが、実際には、動詞から派生した名詞でない通常の名詞や複雑述語を成していない場合でも振る舞いは変わらない。

(38) a. What does he have a strong will to do?

b. What did he reverse his decision to do?

このことは、C タイプの wh 移動の要因が、先行名詞と不定詞節との統語的な関係が重要であることを示唆しており、先行名詞が動詞派生であるという形態的・意味的關係や、通常と異なる統語構造が想定可能である複雑述語等に要因があるのではない。

また、本稿の主張は、C タイプと P タイプの間で解釈に曖昧性を持つ文における wh 句の振る舞いによっても裏付けられる。

(39) We have a plan to spend our holidays in Beppu.

a. 我々は休日を別府で過ごすという計画がある。

b. 我々は休日を別府で過ごすための計画がある。

(39)の文には日本語訳のような曖昧性がある¹²が、(39b)の解釈に基づく wh 疑問文は容認されない。

(40) a. Where do you have a plan to spend your holidays?

(どこで休日を過ごすという計画があるの?)

b. *Where do you have a plan to spend your holidays?

(どこで休日を過ごすための計画があるの?)

以上、本節では C タイプの AIC が統語的・意味的に先行名詞の補部になっており、統語範疇としては TP を投射することを示した。

5.2 意味合成

P タイプ AIC は統語的に付加詞であり、意味の上でも先行名詞の命題的内容には入らないのに対して、C タイプ AIC は統語的にも補部であるので、意味の上でも先行名詞の命題的内容に含まれると考えるのが自然である。したがって、C タイプ AIC の内容は構成役割 (CONST) に単一化 (unify) されると考えられる。補部を持つと考えられる名詞として plan を考えてみよう¹³。

- (41)

plan QUALIA STRUCTURE <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px;"> <i>Truth-conditional Section</i> FORMAL: <i>information</i> CONST: ① [PLAN_(-real) ② [(x, [DO (z, e)])]] </div> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px;"> <i>Non-truth-conditional Section</i> TELIC: ② </div>

¹² インフォーマントによれば、(39a)の解釈が第一義的である。その理由は明確ではないが、おそらく、意味的に補部を要求する名詞の場合、後統部分が補部と解釈できる限りはそう解釈する方が意味解釈上の負担が少ないためであると思われる。実際、I have a plan to go to Kyoto to go to Tokyo. という文は「東京に行くための、京都に行く計画がある」と解釈可能であるが、「京都に行くための、東京に行く計画」とは解釈されない。このことも、C タイプの AIC が先行名詞に対する項となっているのに対して、P タイプの AIC が付加詞であることを示している。

¹³ 意味述語 DO は、あるイベントを意図的に行うことを表す。

└└ TRIGGER: *make* (x , [1]) ┘ ┘

CONST の「-*real*」という記述は、plan が補部に対して非現実の解釈を要求することを示しているが、これは便宜上の記述であり、TRIGGER の値として CONST に示されているイベントと同じものが登録されていない場合に自然に読み込まれる性質である（「+*real*」に関しては後述する）。また、CONST の値は、あるイベントを計画する主体 (x) とそれを行う主体 (z) が異なっても構わないことを示している。通常は x と z は同一指標を与えられる（つまり 2 つの主体が同一のものになる）ことが多いが、(42b) のように異なる主体を統語的にも実現することができる。

(42) a. We have a plan to go to Florida.

b. We have a plan for you to go to U.S. to study.

(41) と (42a) 中の AIC を単一化した、つまり (42a) の目的語全体の意味表示は次のようになる（変項に関してはそのまま x, y 等で表す）。

(43) [plan to go to Florida
 QUALIA STRUCTURE
 [Truth-conditional Section
 FORMAL: *information*
 └ CONST: [1] [PLAN(-*real*)([2] [x_i , [DO(z_i , [GO(z_i , FLORIDA))])]]]]
 [Non-truth-conditional Section
 TELIC: [2]
 └ TRIGGER: *make* (x_i , [1]) ┘]]

ところで、Pesetsky and Torrego (2004) によれば、補部に「現実」の解釈を要求する dislike 等の名詞は不定詞補部を伴うことができない。

(44) a. *Mary's hate/hatred to ride in the car

b. *John's dislike to hear rumors about them

c. *Sue's love to solve problems

d. *Harry's bother to check the facts

- e. *Bill's luckiness to win a prize (Pesetsky & Torrego, 2004, 520)

この中で、例えば dislike の意味表示は次のようになる。

- (45)
$$\left[\begin{array}{l} \text{dislike} \\ \text{QUALIA STRUCTURE} \\ \left[\begin{array}{l} \textit{Truth-conditional Section} \\ \text{FORMAL: } \textit{psych. state} \\ \text{CONST: Dislike(+real) (x, z)} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} \textit{Non-truth-conditional Section} \\ \text{TELIC: } \phi \\ \text{TRIGGER: PERCEIVE (x, z)} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

dislike 等の、補部に「現実」を要求する名詞の特徴は、補部にあたるイベントやモノ (z) を知覚したり経験したり、あるいは実際に行ったりといったことが TRIGGER の値として登録されているということである (「+real」という表記は便宜上であり、この TRIGGER 値としての登録が「+real」の実態であることになる)。このような語彙登録に基づいて考えれば、不定詞を伴うことのできる名詞は命題レベルのみにその不定詞で表されるイベントが登録されているのに対して、不定詞を伴うことのできない名詞は非命題レベルにもその不定詞で表されるイベントが登録されており、主体がそのイベントに前もって関わる必要があるとなる。そのような意味的な違いが不定詞補部の可否につながっていることが推測される¹⁴。

6 結語

本論では、いわゆる不定詞の形容詞的用法といわれるものの中で、特に AIC

¹⁴ なぜ非命題レベルが関わりと不定詞補部が取れないかは現段階でははっきりとわからないが、少なくとも不定詞補部の可否について Pesetsky and Torrego(2004) の観察に対するある一定の動機付けは与えられるであろう。

内に通常の関係詞節と同じ空所が存在しないと考えられる用法の統語構造と意味解釈のメカニズムを中心に議論した。関係詞的な AIC と本論で P タイプと呼ぶ AIC が CP 構造をとるのに対し、本論で C タイプと呼ぶ AIC は TP (もしくは IP) 構造をとることを主張し、特質構造を用いてそれぞれの用法の意味合成のメカニズムを記述・説明した。本論により、モダリティ的な解釈と総称的解釈、「現実」の解釈がどのようにして出現するかについての意味解釈モデルはある程度提示できたのではないかと考える。

参考文献

- Bhatt, R. (1999). *Covert modality in non-finite contexts*. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Fleisher, N. (2011). Attributive adjectives, infinitival relatives, and the semantics of inappropriateness. *Journal of Linguistics*, 47, 341–380.
- Hidaka, T. (2012). *Word formation of Japanese V-V compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- 日高俊夫 (2012). 「日本語動詞における使役起動交替のメカニズム」. In KLS 32. 関西言語学会.
- Higgins, F. R. (1973). *The pseudo-cleft construction in English*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Huang, C. J. (1982). *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*. Ph.D. dissertation, MIT.
- 影山太郎 (2005). 「辞書の知識と語用論の知識 – 語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」. 『レキシコンフォーラム』, 1, 66–101.
- Kjellmer, G. (1975). Are relative infinitives modal? 1. *Studia Neophilologica*, 47 (2), 323–332.
- Pesetsky, D. & Torrego, E. (2001). T-to-C movement: Causes and consequences. *Current Studies in Linguistics Series*, 36, 355–426.
- Pesetsky, D. & Torrego, E. (2004). Tense, case, and the nature of syntactic categories. In Gueron, J. & Lecarme, J. (Eds.), *Syntax of time*. MIT Press.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Ross, J. R. (1967). *Constraints on variables in Syntax*. Ph.D. dissertation, MIT.

「形容詞的用法」不定詞の統語と意味解釈について（日高俊夫）

Stowell, T. A. (1981). *Origins of phrase structure*. Ph.D. dissertation, MIT.

安井稔 (1983). 『英文法総覧』. 開拓社 .

Zubizarreta, M.-L. (1987). *Levels of representation in the lexicon and in the syntax*. Foris.

岸本秀樹・菊池朗 (2008). 『叙述と修飾』. 研究社 .

桑原和生・松山哲也 (2001). 『補文構造』. 研究社 .